

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

親鸞の生きた人生態度を、現代社会の大切な思想として掘り起こそうと、親鸞の思想・信念を時代社会の関心の言葉で思索し、考え直す試みとして公開講座を行っています。

「浄土を求めさせたもの

—『大無量寿経』を読む— ⑤3

「無慚無愧」ということ

親鸞仏教センター所長 本多 弘之



連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」のテーマのもと、東京国際フォーラム（有楽町）において、当センター所長・本多弘之が問題提起をし、参加者の方々と質疑応答が行われている。この3月～8月は、新型コロナウイルス感染症の拡大にともない、休講とさせていただいた。ここでは、先に行われた第128回から一部を紹介する。

（親鸞仏教センター嘱託研究員 越部 良一）

『無量寿経』に「無義無礼」（『真宗聖典』73頁、東本願寺出版、以下『聖典』）という言葉があります。義なく礼なしと。親鸞の言葉で言えば、これは「無慚無愧」という言葉になるのではないかと思います。慚愧の心がありません。

慚愧というのは、慚も愧も恥じるという心理を言い表す言葉なのですけれど、現代日本語で言う恥のように、人に見られて恥ずかしいというだけのこととは違います。真実に照らして恥ずかしいという言葉が慚愧です。我々は人が見ていないからいいだろうということで、心が動いてしまう。しかし、存在の本当の在り方を求めていこうとする方向性をもった場合には、その存在の本当の在り方に対して自分が起こす心とか行為が恥ずかしいと感じられる。だから『教行信証』『信卷』の『涅槃経』からの引用では、「慚愧」について、「慚は人に羞ず、「愧」は天に羞ず。これを「慚愧」と名づく」（『聖典』257頁）と言われるのです。慚というのは人に羞じるわけだから、倫理にもとることが恥ずかしいと。愧の方は、やはり恥なのだけれども、道理に羞じる、あるいは教えに羞じる。同じ恥という心理だけれど、恥の質に二種類あるというのが、慚と愧という言葉に分かれてくるものなのです。

それを親鸞聖人は、「無慚無愧」とおっしゃる

わけです。慚愧がないということは、ですから単に倫理的な話ではなくて、存在の道理の方に向かって恥じるということが、本当にはないのではないかと、というのが親鸞聖人のお言葉の本意だろうと思うのです。親鸞の言葉というものは、真理の方に向かって生きようという意欲があることがまず第一にあるわけです。親鸞自身はそれを自力の心ではない、自力の菩提心ではないと。どこかで真理の側から見られていて、真理の側から呼びかけられていて、真理が催してくるような心なのです。だからそれは如来回向の信心と言われるわけですね。それはこの五濁悪世を生きている煩惱具足の凡夫の心の中に立ち上がっていく。

親鸞は和讃で、「無慚無愧のこの身にて まことのころはなけれども 弥陀の回向の御名なれば 功德は十方にみちたまう」（『聖典』509頁）と。つまり、如来の名号というものが大悲の表現として与えられていることを信ずる。念仏を真実の依りどころとして、大悲の本願を信じていくことが成り立つところに、どれだけ人間が凡夫であろうと、愚かであろうと、罪悪深重であろうと、それと矛盾せず到大悲を信ずることが成り立つ。大悲なのですから、どのような衆生であろうと必ず救い遂げるのだと。

無慚無愧ということは、それでいいのだというわけではない。無慚無愧という事実でしかないのです。これは他人ごとではない。けれども大悲をいただいていく。この五悪段を通して、これでもかというくらいに様々な悪の在り方の教えがあっても、何か人間は自己肯定をしたいし、自己弁護をしたいわけです。けれど、そうではないような公明正大な如来の御心の前に、お前の心は本当にそうなのかという確かめが与えられてくるのです。

本研究會では「現代とは何か」をテーマに、さまざまな分野で活躍されている方々から、専門分野での課題とその苦闘から問題提起していただき、時代の課題と親鸞の思想・信念との接点を探っています。

第64回

「神国日本」という 語りの重層性

伊藤 聡 氏 (茨城大学人文社会学部教授)

「日本」が「神国」であるという認識は、現代にまで続く自国意識として大きな問題であり続けてきたが、そこには常に強烈な対外意識が作用している。殊に中国との関係性の中で、外来的なものを移入した複合体として日本的なものが形成されながら、「日本に固有のもの」を求める思考も古くからみられたのである。その形成過程、さらには仏教思想との影響関係について、伊藤聡先生に広範かつ詳細にご講演いただいた。その一端をここに報告する。

(親鸞仏教センター嘱託研究員 飯島 孝良)

「日本」が“世界の中心”というニュアンスで使われるのは中世以降からなのですが、そこには三国世界観という仏教的理念が関係しています。これは、インドから中国へ伝播した仏教のエッセンスが日本へ最もよく伝来したとする主観的な世界観です。そこには、ライバル関係にある他の教えを前に仏教が衰退したインドや中国と異なり、天皇を軸にした国家に仏教が守護されているが故に栄えているという、自負心のようなものがみられます。こうした世界観が鎌倉期に入ると末法思想の影響を受け、粟散^{ぞくさん}辺土^{へんち}観という考え方が出てきます。これはもともと、世界の中心たる大きな南閩^{なんえん}浮提^{ぶだい}の周辺に細かい国々があるという意識にすぎません。日本もそうした小国のひとつだと考えるのは否定的な自国意識にもつながり得るのですが、これが次第に「小さい我が国だからこそ仏教を護持している」という肯定的な自己意識になっていきます。『沙石集』などにみられるように、仏が、他国有縁の仏そのものの姿ではなく、日本に相応した神として現れることが、我々日本人が濟度される為には最も有効である——つまり、日本が粟散辺土だからこそ「神国」でなければならない、と考えられるようになりました。

対外関係のなかで形成された自意識という点では、武士の語りにも「神国」の意識が関わってきます。例えば中世神話においては、新羅の侵略(そのような史実はないのですが)をその都度天皇や



化身してきた神々が打破してきたとされています。『八幡愚童訓』や『太平記』にあるこうした語りが、「神国」の武士だという自意識を形成していくのです。

ただ、近世になると、儒者が現れますが、彼らにとって、日本と中国の関係は深刻な問題になってきます。日本に聖人が生まれていないのはやはり日本が中国よりも劣った国だからなのではないか、といった議論も出てきました。その一方で、秦の始皇帝^{ひんしやこうじゅう}の前に日本に聖典がもたらされており、だから失われた聖典が実は日本にあったという話が真面目に史実として受け取られるようなことさえありました。さらには、王朝がどんどん変わる中国に対して王統を一貫して維持している日本のほうが道徳的に優れている、といった議論にもなります。こうした日本優位論が、中国に対する否定的評価を生み出していきました。ただ、明治維新のときに、日本的ナショナリズムと儒教的国学を接合した水戸学などが台頭すると、これが倒幕の道具になるわけです。

こういう日本固有のものへの追求は近世から近代に至るまで繰り返されていて、例えば漢字で書かれた『古事記』の背後に非漢字的な世界を見いだそうとした本居宣長や、神道や仏教の背後に日本の「固有信仰」があるとした柳田國男、あるいはさまざまな中国的な意匠はあくまで形式的なもので、それとは別に日本固有の文化が独自に展開してきたという津田左右吉の言説にも表れています。その一方で、戦時中などは、むしろインドや中国のさまざまなエッセンスを総合した文明という考え方が「大東亜共栄圏」のイデオロギーになっていくわけです。こういう相矛盾した二つの見方を併存して使い分けているのが、古代から近現代までの日本なのだろうと考えています。